

ごも、これは少々手前味噌も加味しての話しである。唯從來の獨逸人の著書に比べて、いくらか公平と云つても宜しい點は、英國の態度に對する見方である。多くの獨逸人の所論は、此度の大戰役を以て英人が久しくたくんだ隱謀の結果だとして居るのに反し、著者は英國を以て最初は眞面目に

平和維持に盡力したものと認めて居る。これが論文の最も出色な點だ。尙ほ此論文は戰爭開始當時に際物として出版された多數の著書とは違ひ、關係諸國の公表材料が一通り出揃つてから、それを熟讀の上に著はしたのであるから、甚しい出鱈目もなく、また敵國の事に關して罵詈謗の限りを盡くすといふこともなく、議論のやり方が甚穩である、大体に於て學術的論文の態度を保つて居るこれが此論文のとるべき所であると云つてよからう。【原】

### 敦賀郡誌

福井縣敦賀郡役所編纂

大正四年十月三日發行

本書は福井縣敦賀郡役所が山本元氏に囑し三年有餘の歲月を費して成れる物、菊版一一七七頁、

附録三四頁の裏然たる巨冊なり。全編地誌、沿革郡治、社寺古蹟、人物の五編より成り、年表、釋解、考據、書目、郡内採收記錄文書、及び索引を附録とし、卷頭及び文中に興味ある多數地圖古文書、人物、遺蹟、遺物等の寫眞を挿入して本文の記事を補へり。

明治、大正にわたりて府縣市郡町村誌の編纂相次ぎしは文獻史上特筆に値すべき事にて、其間推奨すべき名著も亦尠しとせず。今本書を見るに、編纂の體制殆ど間然するところなく、記事概して周密精透、敦賀郡の現況を叙説するに於て遺憾なきと共に、通讀の間讀者をして其多望なる將來に囑目せしむ。殊に余輩の見て快とするは、史的記述の毫も地方的偏癖に陥らずして、大局より着筆せられ、同郡の生命ともいふべき敦賀町を中心として運輸、交通、商業其他の産業に關し經濟史上頗る有益なる記事を以て滿たさるること是なり。これ編者其人を得しと史料蒐集者の努力とに依るべく、同種編著中の白眉なりと謂ふべし。(定價貳圓五拾錢)【三浦】